

光について証し

ヨハネによる福音 1:6-8、19-28

神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。彼は光ではなく、光について証しをするために来た。

さて、ヨハネの証しはこうである。エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちをヨハネのもとへ遣わして、「あなたは、どなたですか」と質問させたとき、彼は公言して隠さず、「わたしはメシアではない」と言い表した。彼らがまた、「では何ですか。あなたはエリヤですか」と尋ねると、ヨハネは、「違う」と言った。更に、「あなたは、あの預言者なのですか」と尋ねると、「そうではない」と答えた。そこで、彼らは言った。「それではいったい、だれなのです。わたしたちを遣わした人々に返事をしなければなりません。あなたは自分を何だと言うのですか。」

ヨハネは、預言者イザヤの言葉を用いて言った。

「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。

『主の道をまっすぐにせよ』と。」

遣わされた人たちはファリサイ派に属していた。彼らがヨハネに尋ねて、

「あなたはメシアでも、エリヤでも、またあの預言者でもないのに、なぜ、洗礼を授けるのですか」と言うと、ヨハネは答えた。「わたしは水で洗礼を授けるが、あなたがたの中には、あなたがたの知らない方がおられる。その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物のひもを解く資格もない。」これは、ヨハネが洗礼を授けていたヨルダン川の向こう側、ベタニアでの出来事であった。

四つある福音書のうち、マルコとヨハネの福音書は洗礼者ヨハネのエピソードから始まります。新約聖書は福音書から始まるので、新約聖書は洗礼者ヨハネのはなしから始まるという見方もできます。先週は、聖書のテーマはイエス・キリストのはずなんだけど、なんで始まりがヨハネなんだろう、へんだなあ、不思議だなあという話をしました。きょうのテキストはヨハネの福音の最初の部分 1 章 6 節からなのですがやはり洗礼者ヨハネのエピソードです。この不思議は旧約聖書の最後をみることでひとつの回答が導き出せます。

見よ、わたしは／大いなる恐るべき主の日が来る前に／預言者エリヤをあなたたちに遣わす。彼は父の心を子に／子の心を父に向けさせる。わたしが来て、破滅をもって／この地を撃つことがないように。 マラキ 3:23-24

このマラキ書のテキストで旧約聖書は終わります。マラキ書は 3 章まであり、その最後の締めのことばがいま引用した 23-24 節です。23 節で「預言者エリヤをあなたたちに遣わす」とあります。そして「彼」= 預言者エリヤの役目とは「父の心を子に／子の心を父に向けさせる」ことだと書いて旧約聖書は終わっていることになります。

このマラキ書で預言されているエリヤが洗礼者ヨハネだとしたらどうなるでしょうか。

洗礼者ヨハネは「悔い改めよ」といって洗礼を授け、多くの人たちがエルサレム全土からヨハネのもとに集まり洗礼をうけていたと記録されています。そしてヨハネはわたしよりも偉大な方がいる、その人はわたしのあとに来られると証言しています。つまり自分はただの先ぶれです、とっています。きょうの聖書箇所では、

彼は光ではなく、光について証しをするために来た。 ヨハネ 1:8

この 8 節で彼つまり洗礼者ヨハネは「光ではない」、光の証し人として神か

ら遣わされたと記録されています。その光とはイエス・キリストをさしています。

このように読めば、洗礼者ヨハネはマラキ書で預言されているエリアの役目を果たしていると理解することも可能になります。でもわざわざ「彼は光ではない」と断らなければならないのでしょうか。どうもキリスト教が成立した頃、福音書が出来上がった頃には洗礼者ヨハネの影響を強く受けた教派があってイエスよりも洗礼者ヨハネを崇拝する傾向もあったようです。

皮肉な見方になりますが、イエスがポツとエルサレムに現れて活動を始めたら信じる人はあらわれるでしょうか。イエスが街角で洗礼を始めだしたら、その方こそが世の救い主として信じる人であふれかえるでしょうか。天才的な宗教者がそれをおこなえば実際に信者はふえていくでしょうが、福音書に記されるイエスはそんな活動をしていません（イエスは誰にも洗礼を授けていません）見方にもよりますが、イエスは天才宗教者として福音書には記されていないように思えます。栄光ではなく、どちらかというと惨めに、イエスはまるで屠られる子羊のように描かれているように私にはおもえます。

かたや洗礼者ヨハネは人々の支持も厚く、まるで預言者エリアのようないでたちで断食と荒れ野での生活をおくり、さいごは時の権力者を批判して獄死するというドラマチックな人物として描かれています。

実際に洗礼者ヨハネは実在し、福音書に記録されているような活動、洗礼活動をしていたのだと思います。そしてそれは人間としてできる最高の活動であり、まさにイスラエルの預言者たちのおこなってきた活動、神への立ち返り運動そのものだったのではないのでしょうか。

イエスの到来への大いなるプロローグとしてそれまでのイスラエルの歴史があったと解釈すると、洗礼者ヨハネはイエス到来の最終的な仕上げとして登場し、イスラエルの歴史を通して先例のない洗礼という活動をとおして「主

の道をまっすぐ」にしたといえます。それがキリスト教の洗礼者ヨハネに対する解釈だとも思います。だから福音書の冒頭に洗礼者ヨハネのエピソードが記録されたのです。

はなしは変わりますが、光といえば太陽です。もちろん電球だったりLEDだったり、ろうそくの灯りであったりもするわけですが、光の大もとといえは地球に生きるわたしたちにとっては太陽です。わたしたちは太陽を見ることはできます。光を見ることはできる（と思っています）

先日、プラネタリウムで太陽をテーマにしたプログラムを見ました。そこでわたしは普通に目で見る太陽ではなくてエックス線（レントゲン）を通して太陽の映像を見ました。エックス線望遠鏡でみた太陽の映像です。その映像では太陽のフレアが映し出されていました。さて、太陽はなんで光っているのか？太陽の中心部で起きる核融合で光っているのだそうです。核融合とはひらたくいえば核爆発のことです。くだきたいいかたで正確な表現ではないのですが、太陽の光とは原爆の光のようなものなのではないのでしょうか。太陽のフレアと呼んでいるものは太陽表面でおきる核爆発で、小さいものは一日で数回おきているごく普通の現象だそうです。わたしたちの目には見えませんが、エックス線をとおして見る太陽ではその爆発の様子を観察することができます。その太陽の映像は正直言って不気味でした。

見よ、わたしは／大いなる恐るべき主の日が来る前に／預言者エリヤをあなたたちに遣わす。彼は父の心を子に／子の心を父に向けさせる。わたしが来て、破滅をもって／この地を撃つことがないように。 マラキ 3:23-24

彼は光ではなく、光について証しをするために来た。 ヨハネ 1:8

とうとつに、また、にわか仕込の知識で太陽フレア=太陽表面爆発のはなしを持ち出しましたが、きょう引用し、いま再度読んだマラキ書、ヨハネ福音書の聖書テキスト（光や破滅に関する記述）をこの太陽フレアになぞらえて比喩的に読むと洗礼者ヨハネはイエス・キリストの先触れだとか、ヨハネエピソード

ドは偉大なるプロローグだとか、旧約聖書と新約聖書をつなぐ役割だとかという解釈がふきとんでしまうような気がします。福音に立ち返れば、とてもシンプルに光 = イエス・キリストについて記述されています。主の降誕を待ち望む第三主日をこの福音をもって結びとします。

神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。

ヨハネ 1:6-7
